

## 江藤保定博士著『宗祇の研究』

稲田利徳

研究対象への無限の愛情、執着、それゆえに試行される容赦なき対象の解剖、分析——これは、江藤保定氏の大著『宗祇の研究』を讀みおえた時、私の胸に静かに浸透してきた偽なき感慨であった。

江藤氏のその三十余年にわたる長い研究生活は、まさに、宗祇研究一筋に貫ぬかれてきたといつても過言ではない。その間、氏は、広島から東京、北海道、そして再び東京と「長い遙かな道」(久松一氏の序文)を歩んでこられた。

その研究成果が、この度、研究編五八九頁、資料編四二九頁、あわせて千頁の巨冊に結実して世にでることになったが、視点をかえればこの著書は、一人の真摯な研究主体の、長い期間にわたる精神の軌跡であるとも考えられるのである。

さて『宗祇の研究』の前半をしめる研究編は、序説および五章より構成される。序説では従来の宗祇の研究状況を概観し、さらに、以下に展開される論考の基底となるところの研究方法を開陳されている。

第一章「宗祇の系譜」は、一、宗祇の系譜意識、二、宗砌・心敬の受容、三、宗祇における連歌形態の成就、四、連歌史・中世歌学の伝統、の四節からなるが、最も興味深かったのは「宗砌・心敬の

受容」の第二節である。

ここで著者は、連歌論における宗祇の精神系譜を、直接の師であった宗砌・心敬の受容という角度から分析される。そして、宗砌の連歌には、伝統の枠にとらわれぬ、新しさ、面白さの自由の萌芽があったが、それに徹したのでなく、すべてを古典によって説明しようとしたところに矛盾があったこと、また、心敬においては「形而上的な聖性への内面的上昇」が認められ、清澄純粹ではあったが、連歌本来の特質たる「面白」などの、現実的、主知的なものを止揚していないと、各々、その長短を指摘される。ついで「有心」を基調とする宗祇の文学観を分析された結果、宗砌・心敬の長所を、共に高き意味で継承していること。具体的にいえば、心敬からは、冷えさびの心の深さを、また宗砌からは、着想の新奇さと面白さを受容し両者を調和融合しているところに、宗祇の文芸観の特質を説かれた。

論旨は明解で、その系譜は、鮮やかすぎるほど見事に跡付けされている。「すぎる」とは、いささか批判めいた気持を含めたつもりなのであるが、それは、やや図式的な傾斜が認められなくもないということである。その因の第一は、宗砌、心敬を、あまりに一面的

にとらえずぎてはいないかという疑問であり、第二は、宗祇によって達成されたという「調和融合」「止揚」の内実はいかなるものであったかという疑問である。「止揚」という言葉は、ともすれば、論理展開を安易に放置してしまう危険性があるが、「併存」などとは峻厳に区別された、具体的な内実の説明をともなわねばならない。その意味で、著者が「水かほり花いさぎよき深山かな」（九四頁）の表現分析で指摘されたような、宗祇の作品における「止揚」の様態を、もっと詳細に説いてほしかった。その作業遂行は、逆に著者の持論である、宗祇における、心敬・宗砌の「調和融合」を証明するとともに、その内実をも明瞭にするであろう。

第二章は「作品にあらわれた対象」の表題のもとに、一、宗祇の旅と旅の生涯、二、宗祇の草庵文学、の二節で構成されているが、前者は百頁にわたる大作であり、この章の中心である。

著者は、宗祇の連歌には、原体験に裏打ちされた心境的告白、心の反映を読みとることが不可能でないと言われ、その表現を通して、宗祇の生涯の旅の観想の変貌を跡付けられる。まず、生涯を、中後の三期に分けられ、初期の関東流浪時代は、悲哀と苦悩の心情が色濃くでており、都を渴望した時期であったこと、中期は、宗祇が都に帰り、連歌界で活躍した頃で、旅の作品にも明るさがみられ、現実肯定と市隠の自覚が基調をなしていたこと、そして「筑紫道記」の旅を契機として、後期においては、故郷の否定、断念となり、現実外へ越えていたとされる。いわば、宗祇の旅に対する観想を発展段階的に把握されたわけである。

このように、宗祇の人間像をとらえるに際し、著者は、最もとりつきやすくして、しかも最も困難な道につかれた。そこに研究方法

に対する苦心の跡が認められる。序章の研究方法は、この第二章と次の第三章において、著者の意欲をともなうて強烈に蘇生して行く。結局、この章を読み進むとき、逐一おこってくる疑問は、著者の提示された連歌が、はたして著者のいわれるように、宗祇個人の体験的な心境を、そのまま表現したものかどうか、それは、隠者的共同体の典型的表現にすぎないかもしれないことである。著者は、こういった疑問を明確に自覚され、宗祇の連歌が「共同体的類型性を代表する文学」と認められながらも、なおかつ、そこに、原体験による心の反映という「重層的性格」があり、その層をはらうことによって「実存的研究の可能性」の存することを提唱される。いわば、それは、連歌を単なる美的表現としてだけでなく、もっと人間存在の根源から理解せんとする姿勢である。それゆえ、そこに引用される宗祇の作品は、大部分、独吟類でしめられ、それに「白河紀行」「筑紫道記」の紀行が加味され、いわゆる、共同体的創作による連歌は、あまり採用しないという、細心の心づかいがなされている。

著者のかかる研究方法の確立と、細心の資料駆使のおかげで、この章を読みおえた私の脳裡には、旅の中にその生涯を終った、宗祇の人間像が影をやどしていた。その像は、かく、あった宗祇像でなく、かくあるべき宗祇像であるかもしれないが、著者の苦心の造型として大切にしたい。

次に第三章は「作品にあらわれた意識」と題して、一、宗祇の憂鬱「うし」を中心として、二、忘我と月花「うかれ」をめぐる、三、宗祇における佗び・寂びの生成、の三節によって構成されている。ここで著者は、そのサブタイトルが示唆しているように、

宗祇の生と作品が「うし」と「うかれ」を基調として存在し、生成した。また、この「うし」と「うかれ」は、宗祇の美意識の両極をなうものであり、それを「調和融合」するものとして「あはれ」の精神があったこと。そして、窮極において宗祇の現実の苦悩を救済するものは、この「あはれ」の思慕、その伝統性を守ることであったと説かれる。その考察過程にあつては、万葉・古今・新古今など、先行文芸との比較を行い、宗祇の「うし」「うかれ」の独自性を究明せんとする姿勢が感ぜられる。かつて「国語と国文学」誌上（昭16・5）に発表された、この章の同題目の論文と比較すると、その後の増補、改訂の部分が、いかに宗祇の独自性、特色を把握することに主力がそがれているかが痛感される。

第五章は「作風論」であるが、第一節で、宗祇の連歌の本質的性情とその内実を「有心」にみいだされ、ついで、第二節では、それをうけ、宗祇の詩を形而上詩、述懐の詩と規定し、そこに人生の睿智と現実苦の哲学的な救済を読みとってゆかれる。しかし、宗祇は、有心連歌でもって生涯を終始したわけではない。現存する「壘字連歌」や、諸書に散在する俳諧資料に徴しても、宗祇が俳諧連歌に手を染めていたことは事実である。かつて、正風連歌から俳諧性を排斥し、また「新撰寛政波集」にも、俳諧の部立をしめだした宗祇である。この自己矛盾をいかに理解するかの苦心の論が第三節「宗祇の俳諧連歌」である。そして、著者は、宗祇が俳諧を行ったことは、決して自己矛盾でなく、共に「正直」の精神を基底としてなされていること、系譜的に言えば「有心」に止揚された、宗祇系「面白」が、その抑圧により逸脱、再分裂したもの、また、ジャンルの史的展開からみれば、有心連歌からの俳諧性の分裂の契機を

はらんでいたと、明確な論を展開される。かかる結論の当否はともかく、この第三節は、俳諧作品の分析などに、著者の円熟味があふれ、最も興味深く味読できた。

最後の第五章では「近世俳諧史における宗祇の位置」を論じられる。ここで著者は、江戸期の俳諧書の博搜によって、近世俳諧師たちが、宗祇を俳諧史の上で、どのように位置付けているかを、三期に分けて展望される。そして、近世を通して、通説となっていた、守武、宗鑑の俳諧始祖説のなかで、芭蕉が「三聖人図贊」で、宗祇を加えたことを、流派意識を越えた、深い歴史認識だとされ、高く評価される。そして、さらにその系列を「真木柱」（華堂）「俳諧」（白露）にも認められ、「宗祇の俳諧の近世的画期性は、近世俳諧の早生児であった宗鑑、守武の先駆として、連歌との二重性において明確に認められ位置づけられてよいのではないか」と主張される。

以上、曲解を恐れながらも、全体の骨子を概略紹介してきたのであるが、その論理展開は、きわめて整然としており、各章相互に、これといった大きな矛盾は、ほとんど認められなかった。これは、著者の、日本文芸史上における宗祇の位置づけ——すぐれた集大成者、調和融合者であり、かつまた、近世詩の黎明に立つという明確な見識をもって貫ぬかれているためであろう。しかし、第一章でも触れたように、こういった持論が、逆に柔軟な展開をさまたげ、画一的に「融合」「止揚」という方向にむけられたという感をいだかせるところもある。この点「止揚」の過程と内実をきわめることが肝要であろう。

また、全編を読みおえたとき感じた、大きな疑問は、結局、宗祇

にとつて、連歌はいつたいなんであつたかということである。著者は、宗祇の連歌作品を、主観的な心境告白、述懐の詩、また、現実苦からの救済、慰藉の詩ととらえられている。そのため、資料として採用される連歌も、主として、独吟類、発句などが重要視される。これは一応、正しい理解であり、処理でもあろうが「宗祇にとつて連歌はなんであつたか」という疑問に全面的に答えることにはならない。後の資料編でも認められるように、作品の多くは、他の連歌師との共同のなかで作成されたものである。集团的共同体的な創作の場で、そこに展開する付合などをめぐり、個性と類型の脈絡があやなす世界、連歌文学の特色がそこにある。『宗祇の研究』では、こういった創作の場に、創作主体を位置させて、宗祇をとらえることはあまりなされていない。これは至難なわざではあろうが、いつかは究明せねばならない問題である。

研究編で、偶々、氣付いた誤植の類は、約二十個所程度であつたが、なかには「生活」(小島氏の)(十二頁)(生涯が正しい)、「早し」(筑紫道)(一〇三頁)(寒しが正しい)など、単なる誤植と思われぬもの、「真木柱」と「花見車」の作者をとりちがえたりしたもの(五六七頁)もあつた。

資料編は、宗祇関係の百韻連歌五十四編、千句連歌六編、計六十編を収めたもの。この六十編はすべて写本による翻刻であり、同一作品で他の伝本の存するものは、できるだけ集め、校異を示してある。まさに、苦勞の多かつたお仕事であり、益するところ大であらう。ただ氣になることは、最初、宗祇の全作品を網羅される予定であつたが「発行期日と紙幅の関係」で、割愛したものが、二十九編もあること、さらに、私に調査してみると、割愛されたもの以外に「長享元・十・十・百韻」(京大)、「何人百韻」(発句梅が)(天満)などはじめ他に十数編の作品が洩れていることであ

る。これらは、早いうちに増補されることだが、やはり、我々としては、研究編と切り離してもよいから、厳密な「宗祇連歌作品全集」といったものを編んでほしかったと思う。

ともあれ、江藤氏の大著「宗祇の研究」は、連歌作品の表現を通して、その「文学的実存の形姿」を探求されたところに、大きな特色をもっており、その方面での、画期的な業績といえるであらう。かかる一貫した姿勢を長い期間にわたり持続し、見事に体系化されたことに對し、頭のさがる思い切である。すでに、我々は、荒木良雄、伊地知鉄男、井本農一各氏の「宗祇論」を有しているが、江藤氏のこの大著は、それらに伍して、大きな位置をしめることは確実である。また、内容紹介ではあまり触れなかつたが、宗祇を論ずる際、芭蕉を常にひきあいにだされており、芭蕉研究者にとつても、参考になる点が多い。

最後に私は回想に身を委ねる。昭和三十七年初夏の頃であつたと思う。宗祇研究で学位を得られた江藤氏は、北海道から、遙々広島へこられ、大学の講義室で、学位論文にちなんだ研究発表をされた。当時、西行から宗祇にいたる、中世隠者文学の系譜の考察を志していた私は、ひとしお、興味をもって傾聴していた。その時、江藤氏は、最後に言われた「私は学生の頃、土井忠生先生の御宅を訪問したことがあります。その際、先生は私に向い、『著実にやりなさい』とおっしゃった。私は、今日まで、この御言葉にそって、著実にやってきたつもりです」と。この一言は、私に鮮明な印象を与えた。江藤氏が、この大著出版で安堵されることなく、今後とも、歩一步『著実』に宗祇を究明され、我々若輩を導びいてくださることを念願してやまない。

(昭和四十二年六月三十日刊、A5判、研究編五八九頁、資料編四二九頁。七五〇〇円。風間書房)